

古典入門期の授業の試み

加藤 昌 孝

一 古典入門期の指導は？

(1) 入門期にこそ具体的な指導を

高一の古典入門期の授業は、何かと気を遣うことが多い。中学校で読んできた作品も多様であるし、どの程度読み込んできているのかも不明だからである。さらに古典の教科書の入門期の生徒への呼びかけも不十分である。抽象的・観念的な事項が書かれているだけで、生徒には曖昧模糊たるものと映るに違いない。

そこを乗り越え、かつ、生徒を古典の豊かな世界に触れさせるにはどうしたらいいのだろうか。この課題は入門期の古典を担当する教師の共通の悩みであろうと思う。

そこで、入門期の古典を担当するにあたって、「教科通信・古典の広場」^①を発行することにした。これまでの経験に基づいて、古典

入門時にどうしても生徒に伝えておきたいことを、「古典の広場」の第一号「古典を学ぶにあたって」を配布した。

(2) 文法は作品理解のための道具。文末を「文節」で読む。

文法的知識は作品の真の理解に必要である。しかし、文法的知識をのみ追いかけると「文法嫌い」、そして「古典嫌い」を拡大生産することになってしまう。その辺をどう統一的に指導していくのか、難しいところである。

そこで生徒に「文法道具説」を強調しながら、作品の「音読」を奨励した。作品の中の、入門期の生徒にとって難解と思われる言葉は「古典のひろば」の第三号「語句の説明」で補ないながら読み進めた。作品の理解には、一定の文法的知識が必要であることを説いた。

日本語（現代文も古典も）は、文末と読点の直前に、語り手・書

き手の意志や思考、そして感情などが表現されるといふ特徴がある。作品の中の登場人物の思いも同様に表現される。

その点を考慮して、一般的に行なわれている文法的指導とは、別な方法をとった。それは助動詞から始め、「文末の文節」を読むという方法である。ついで形容詞・形容動詞と進行させる方法である。この方法は是非は、今はわからない。後日、総括したいと考えている。

なお、補助教材として「新・古典の文法」（中央図書）、「常用国語便覧」（浜島書店）を与え、授業には必ず用意することを習慣化させた。

二 古典入門期の読みの実際

(1) イメージをつくらせながら読む

「素直な生徒」は、ことばのつくり出す形象から、自分のイメージを述べる。友だちのつくったイメージと自分のイメージを重ね合わせ、比較し、読みを深めていく。生徒たちは、その時、自己と他者の客観化（異化と同化）の作業をすることになる。作品を通じての教室の「対話」と言ってもよいだろう。この時、生徒は、「自分は自分」、「自分は彼と同じ」と認識したりする。この行為の積み上げは、生徒の自立・自己形成につながっていく。この場合の前提条

件として、「教室」が「自由な空間」になつていなければ、生徒は自分の「イメージ」を表現しない。生徒にとって、この「イメージ」を出し合う授業は楽しいようである。文学の「読みの方法論」としては、文芸教育研究会の方法、児童言語研究会の方法、科学的「読み」の研究会の方法、教育科学研究会の方法等があり、今それぞれ立場で、実践的に取り組まれているが、作品のジャンル、長さ、質等を考慮し、自由な選択が必要である。

ことばをていねいに追いかけて、生徒にイメージを自由に語らせ、「教室」における「集団的な読み」を成立させていきたい。

(2) 作品をどう読んだか

4月以降教科書（東京書籍）教材の『宇治拾遺物語』の「絵仏師良秀」、自主教材として「鼻長き僧のこと」、「沙石集」の「正直にして宝を得たること」を読み、中間考査までに自主教材で『平家物語』の「殿上蘭討」を読んだ。ここでは「古典入門」として、最初に扱った教科書教材の「絵仏師良秀」（三時間）の授業を取り上げたい。前回の授業の終了時に、家庭で「音読」してくることを課した。クラスで六、七名の者が読んできていた。

導入として、「古典の広場」第二号で、『宇治拾遺物語』の「序文」、特に「天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに、貴き事もあり、（を）かきしき事もあり、おそろしき事

もあり)、哀れなる事もあり、きたなき事もあり、少々は、空物語もあり、利口なることもあり、様々やうやうなり」の部分強調し、多種多様な説話の世界があることを説明して授業に入った。

① 授業記録 一時間目の授業

通読。この時、最初の作品ということで、この説話がいくつの文で成立しているか、生徒に文頭に番号をつけさせる。

T 今から、読んでみるから、いくつの文でできてるか、文の頭に番号つけてくれるか。文、わかるわな。丸から丸までが一つの文やぞ。

—— T 全文読む ——

どうや、文、いくつあったかな、S1。

S1 二十……

T え、そんなにあるか。S2は、どうや。

S2 九、やと思います。

T 何で、二人の答えがこんなに違うんや。誰か？

S3 第八の文のカギ括弧の中の丸まで、一つに数えているんちゃいます。

T よし、そういうことやな、S1は、わしの丸から丸までを素直に受け取って括弧の中にある文も一つとして数えたわけやな。だから、わしの説明が悪かったんやな。ごめんな。それ

じゃ、一文ずつ見ていくか。文法のテキスト、用意しているわな。表紙の裏の助動詞活用表、開けておいてくれるか。S4、第一の文、もう一度、読んでくれるか。

—— S4、読む「これも今は昔、絵仏師といふありけり」——

T 質問、あるか。S4、どうや？ 現代文と違う表現、あったか。

S4 「けり」、今、使わないんちゃいます。

T それな、それから。S5、もうないか？

S5 「いふありけり」、のどこ、現代文と何か違う感じがする。

T それな、「古典の広場」の第一号で説明しておいたことと関連するんやけど……「古典の文の特徴」の最初に出ていたことやけど。S5、思い出したか、どうや？ ヒント、「いふ」と「ありけり」の間に……ことは省略されてる……

S5 「人」が省略されている。

T そうやな、ここは、「者」という言葉が省略されている。「といふ者ありけり」とすればいいんやな。

S2 「これも今は昔」に「これも」があるのは、どうしてですか。

T 注①のどこ見てくれるか、これ、説話の決まりきった表現常套句(板書)、「これも」とあるのは、この話が『宇治拾遺物語』の第三十八番目の話として、載っているの、「これも」

とあるんやな。次に九つの文の文末をみてくれるか？ どんな特徴がある？

S 6 「けり」が多い。

T 第一から第四、第七の文が「けり」、第八は「けれ」だけど、「けり」と同じやねん。古典のテキストの表紙の裏、見てくれるか、過去の助動詞のどこや。そこに、「き」と「けり」が二つあるやろ。「けり」の「已然形」に、「けれ」とあるやろ、それが第八の文の終わりに出ている「けれ」や。ついでに、四十四ページ、開いてくれるか。同じ過去の助動詞でも「き」と「けり」の意味、微妙にちがうやろ。「き」は、直接体験した事柄、「けり」は、人から伝え聞いた過去の事柄を述べる時に使うんやな。今日はこの区別、しっかり覚えて帰るんやぞ。二つセットで覚えておくように。「けり」には「詠嘆」の意味もあるのも、覚えて帰れ、いいな。S 7、第一の文、自分の言葉で言ってくれるか。

S 7 「これも今は昔のことだけど、絵仏師良秀という者がいた」すごい、それでいい。「けり」のどこ、「いたそうだ」としたらもつといいかもな。そうすると、説話文学が、人から、昔から伝わってきた話を誰かが、集めて文字に記した、という事情までがわかることになる。この話の成立条件、良秀が

「絵仏師」でなければ、この話は成立しない。これ、ポイントやぞ。S 8、第二の文、読んでくれるか。

—— S 8、読む「家の隣より火いできて、風おしおほひて迫めければ、逃げ出でて、大路へ出でにけり」——

T 質問、難しいところ、出してくれるか。この文は、主語をきちんと補って読むことが大事やぞ。S 9、ないか？

S 9 「おしおほひて迫めければ」と「出でにけり」

T そのほか、ないか？

S 6 「家の隣より火いできて」は、良秀の家の隣から火が出た、ということですか？

T そういうこと、正解。隣が火事になって「風おしおほひて、そして「迫めければ」となるんやな。S 9、どういことやろ？

S 9 わかりません。

T それじゃあ、ヒント、風が「火をおし包んで」ということから、火は、どうなる？ 誰でもいいぞ、イメージ、言ってくれ。^③

S 6 火が激しくなる、それが迫まってくる……

T それで良秀は、どうする？ S 9、自分の言葉で言ってくれるか。

S 9 逃げ出して、「大路」へ出た。

T そんなところやな、「出でにけり」の「に」の説明、今日二つ目の助動詞、やるぞ。文法のテキスト、四十六ページ、開いてくれ。いいか、そこに、完了の助動詞「つ」と「ぬが出てるやろ。「に」は、どこに出てる。S 10。

S 10 「ぬ」の連用形の「に」。

T よし、完了の助動詞「ぬ」の連用形。次の第三の文、短いけど、ちよつとややこしいところがあるんや。次、S 11、読んでみい。

—— S 11、読む「人の描かする仏もおはしけり」——

T 「人」、「描かする」の「する」、「おはしけり」の「おはし」、この三点重要。説明するぞ、「人」は現代の「人」ではない。「ある程度の身分・位のある場合〔板書〕」に「人」と呼ぶんや。「する」は、あと回しにするとして、「おはし」は「おはす」(板書)の連用形、「あり」の尊敬語(板書)で「いらつしゃる・おいでになる」(板書)という意味。問題は、「仏」も「いらつしゃる・おいでになる」と「仏」に対し、尊敬語^④を使っていることや。「古典の広場」の「古典を学ぶにあたって」で言っておいた「古典はその時代状況の中で読むこと」が、これやな。誰か、自分の考え、言ってくれるか？

S 12 今と違って仏とか仏教が、大事にされていた。

S 3 みんなが仏を尊敬していた。

S 13 仏がみんなの心に生きていた。

T 全員、正解。今も「仏」を尊敬している人もいるけど、時代の共通する精神だったんやな。「する」の説明に入るぞ。「文法のテキスト」六十八ページ、そこに「す」、「さす」、「しむ」、三つの「使役の助動詞」(板書)があるやろ、「する」は「す」の連体形。本日、三つ目の助動詞やぞ。S 14、「使役」ってわかるか？

S 14 人に何かをやらせる……

T そうやな、「後輩にジュースを買いに行かせる」、これを「バシリ」という(笑い)、「バシリ」、これ「りつぱないじめ」やで(笑い)、わかってるな。S 14、ここ自分の言葉で言えるか。

S 14 少し身分の高い人が描かしている仏の絵がいらつしゃいました。

T それでいいんやけど、もうちよつと、書かれてへん、言葉も補って……誰に描かせているんや。仏はどこにいるんや。S 14、もう一回。

S 14 身分の高い人が、良秀に仏の絵を描かせている、その仏の絵

が、家の中にいらっしやいました。

T ようし、お見事。そういうことやな、その家は、どうなつて
いるんや、いま、燃えているんやぞ、それから、その燃えて
いる家の中には、「仏」だけがいるんやないんやな。それが、
次の文に書かれている。次の文、S 15。

—— S 15、読む「また、衣着ぬ妻子なども、さながら内にありけ
り」——

T この文、料理したら、今日は終わろうか、最後やから、がん
ばろうぜ。ここで、「衣」を「きぬ」、「妻子」を「めこ」と
読むこと、あとは「着ぬ」の「ぬ」、それから「さながら」
の意味。「さながら」は「そのまま」「すべて」(板書)、ここ
は「そのまま」の意味の副詞。「ぬ」は、「打消の助動詞」
(板書)、今日、四つ目の助動詞。「文法のテキスト」の五十
八ページ開いて確認してくれ。ここ、全体、誰か、自分の言
葉で言ってくれるか。それ確認したら、終わろうか。

S 6 また、着物を着てへん、妻と子が、そのまま、中にいた。

T ようし、いいぞ。「衣」を着ていなかったから、外へ出られ
なかつたわけやな。今の人なら、裸でも、「パンツ」一枚で
も、人前に出るの平気だけど、昔は、エチケツトがあつたん
やな。

S 6 先生、自分の描いている「絵」を置いて来たんやから、「絵
師」としては、失格やな。

T なかなか鋭い、新しい意見やな。もう時間がないから、それ、
全部読み終えてから、みんなで議論しようか。最後、確認し
て終わるぞ、良秀は、隣の家から火が出た時、人に頼まれて
描いている途中の「絵」と「妻と子」を残して、自分だけ外
へ逃げ出した、ということやな。今日のところに出てきた、四
つの助動詞、しつかり、覚えといてな。少しずつ階段を登っ
て行こうぜ。この後のとこ、家で、絶対、読んで来いよ。起
立、礼。

「授業記録」に明らかのように、少し「助動詞」にこだわりすぎ
たために、生徒諸君は「古典嫌い」になってしまったのではないか、
と心配しながら一時間目の授業を終えた。

② 授業記録 二時間目の授業

二時間目では、良秀の行動と心理、良秀と「人ども」の会話を讀
み取りながら、イメージを出し合う授業を展開した。その授業の場
面をいくつか紹介したい。

ア「ただ逃げ出でたるをことにして、向かひのつらに立てり」の
場合

T 「逃げ出でたるをことにして」は、「逃げることだけに気を取

られて、その前の「それも知らず」の「それ」は何を指している？

S 1 妻と子がいる中にあること。

T ほかには、誰か、いないか？ 家の中に、「仏」も家の中にいるんやぞ。「それも知らず」、どういふことや。

S 1 仏の絵や妻と子がいるのも知らないで。

T 「知らないで」というより、「気にもとめずに」「気にもかけないで」(板書)ぐらいいいかな。そうすると「逃げ出でたるをことにして」と関連させるとどうなる？ ちょっと待

て、「たる」は完了の助動詞「たり」の連体形(板書)「文法のテキスト」の四十八ページ。確認してくれるか。

S 1 自分が逃げることだけ考えて、仏の絵、妻と子のことを気にかけないで。

T そうして、「向ひのつらに立てり」やな。もちろん、良秀がやな。

S 2 「つら」って何ですか？

T 「面」(板書)。これ、道の地面のことや。家と反対側の道路に立っていた、ということや。「り」は完了の助動詞、さっきの「たり」のとこ、四十八ページ。「存続」の意味もある、いいな。助動詞、これで六つやぞ。じゃあ、ここ、イメージ

して、意見言ってくれるか。

S 3 自分だけ逃げてセコイわ。

S 4 大事な「仏」、置いてきて「絵仏師」として失格や。

S 5 妻と子を置いて自分だけ、これ、人間として、アカンわ。

S 6 隣が火事やから、懸命に逃げて来た。

S 7 火事なんやから、夢中で逃げて来たんやから、しゃあないわ。

S 3 そんなでも、自分のことだけ、考えてるのは、いややわ。

T もうないか。それじゃ、次、いつてみるわな。

I 「……煙・炎くゆりけるまで、おほかた向ひのつらに立ちて

眺めければ」の場合

T この文、少し長いから、途中やけど、ここまでにしとくわな。

ここでは、「おほかた」(板書)と「煙・炎くゆりける」(板書)が一番シンドイ言葉かな。やさしいところから聞くわな。

質問するぞ、誰が「見れば」、や？

S 6 良秀が。

T 「わが家に移りて」は、何が移るんや？ S 6、もう一回。

S 6 隣から出た火が。

T 良秀が向い側の道路にたつて、自分の家を見ると、隣から出た火が移っていたんやな。それを良秀が「煙・炎くゆりけるまで」、「おほかた向ひのつらに立ちて眺めければ」やな、

「おほかた」は「一般、おおよそのこと」(板書)と「ふつつである様子」(板書)の二つあるんやけど、ここは、あとの方や。イメージつくれるかな。

S 7 先生、「くゆりける」までは？

T 炎や煙がくすぶっていて、いきなり燃えあがったり、煙が立ちのぼったりする様子。イメージ、どうや？ 自分の言葉で言ってくれるか。

S 8 自分の家が燃えあがっているのを、ふつつに向い側の道路に立って眺めていたんやから、なんか変な奴やな。

S 9 ふつつに眺めているって、どういうことやろ。

T 平然と冷静にいつもと変らぬように……、自分の家が燃えているのに……中には妻や子がいるのにや。次のところ読むと、はっきりするかも知れへんから、読んでみるわな。

S 8 先生、やっぱり、良秀は変な奴やわ。家の中には、妻と子が残っているのに、冷静に自分の燃えている家、見てんやから。

S 10 「芸術家」って、こういう人が多くんちゃう。

ウ 「あさましきこと。」とて、人ども来訪ひけれど、騒がず」
の場合

T ここ、良秀と人どもの、燃えている家に対するとらえ方に違いのあるのわかるか。

S 11 「あさましきこと」、わかりません。

T 形容詞、理解するの一番シンドイって言っといたわな。これが、そうや。「驚き、あきれ」(板書)時、いい場合、悪い場合、どちらにも使う「形容詞」、この場合は、どちらやと思う、S 11。

S 11 火事やから、悪い場合。

T そうするとどうなる？「あさましきこと」と言ったのは、誰や？「騒がず」の主語は誰や？

S 11 やって来た人どもと、あとは良秀。

T 火事なので、やって来た人たちが、良秀に「たいへんやねえ」って、言葉をかけたわけやな。関西弁で言ったかどうか、わしや、知らん(笑い)。それに対して、良秀は「騒がず」やな。

S 11 先生、これ反対ちゃうの？

T 何が？

S 11 自分の家が燃えている良秀が「騒がず」で、やって来た人が「あさましきこと」と、言っている点……

T ああ、そうか、家が燃えている本人が「騒がず」、冷静で、まわりが「たいへんだ」って言っていることか。それなら、この後、もつと変な行動をとるぞ、良秀は。

エ 「『いかに。』と、人言ひければ、向ひに立ちて、家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々笑ひけり」の場合

T ここ、ちょっと説明してしまうけど、やって来た人が「いかに」、「どうしたんですか」って、良秀に聞いたんやな。すると、良秀はそれには答えず、「うちうなづきて」、この「うち」は、「強意の接頭語（板書）やねん。下の「うなづきて」を強めるんや。「うん、うんうなづいて」、そして「時々笑ひけり」やから、時々笑っていた、ということやな。ここ、どんな、感じや。誰でもいいぞ、思ったこと言ってくれるか。

S 10 何か、気味悪いわ。

T 何でや？

S 3 自分の家が、焼けてるの見て、笑っているやんから、ほんまに変わってる奴やわ。

S 8 ほんまに変な奴や。こんな絶対、変や。

S 12 家の中に、妻と子がまだいるのに、笑ってる、いややな、こんなん。

S 13 ほんまの芸術家っていうのは、こういうのを言うんちゃう。

S 8 そんなんは、芸術家って言わへんのちゃうんかな。いくら「絵」のためと言ったって、心のない奴の絵なんて、人は感動しないんちゃう。

T 「うちうなづきて」は、火を見て「うなづいて」、そして「笑っている」んやから、良秀は、何を思っているんやろう。

S 6 「絵仏師」やから、絵の材料に使おうと思つて、観察している。「火事」を直接見られる、絶好のチャンスと思つてる。

T じゃあ、この「笑い」は、どういう「笑い」や？

S 6 納得、喜び。満足。

T 自分の家が、燃えて「納得、喜び」の笑い。ちょっと不気味やわな。 — 後略 —

この後、同様の授業を展開しつつ、「あはれ、しつる所得かな。年ごろは悪く描きけるものかな。」と言ふ時に、訪ひに来たる者ども、「『はいかに、かくて立ちたまへるか。』と言ひければ」まで読み、三時間目につないだ。

(3) 三時間目

授業記録は省略。ここでは、良秀の言葉を深く読みその人間性を考えさせた。とくに「その後にはや」以下の編者の評価の是非を生徒に考えさせてみた。授業の最後十分で、生徒の意見・感想を書いて、この教材を用いての授業を終えた。

三 生徒の意見・感想

——鑑賞・批評のレベルを展望して——

「文法的知識」をまだほとんど持たない入門期の生徒にも「文学的感動」を伝えたいと思いつつながら授業を展開した。「ことばの獲得（この場合は文法的知識による言葉の獲得）」は、生徒の感動世界を拡大すると思いつつも、「文法的事項の説明」ばかりだと生徒は退屈してしまう。「古典嫌い」の生徒を大量に出してしまう。かといって、それをしなければ、作品世界に深く踏み込むことができない。「古典の文学教育」が成立しない。

「古典の広場 第七号」に、七クラス全員に書いてもらった読後感を掲載した（授業に対する意見でもよいとした）。一クラス分全員のものをプリントし、学年全員に配布した。高校最初の古典に出会った生徒の「直観的感想」である。予想通り、良秀の心理と行動に対するものが多かったが、その是非はほぼ拮抗していた。

稚いものが多い。しかし今後さまざまな時代の、多様なジャンルの作品を読む授業を通じて、この稚いレベルから鑑賞・批評のレベルまで、生徒を到達させていきたいと考えている。そのためには科学的指導方法の確立、教材の厳選と配列とが必要である。指導過程論・教材論を視野に入れた「古典文学教育」の体系化が求められて

いる。昨今の「文学教育」に対する風当たりの強い状況に対峙する「古典教育の方法論」の確立が緊急の課題になってきている。

古典を読むための基礎的な力をつけ、さらに文学としての古典の魅力を生徒に伝えていくというこの課題は、古典教育における宿命的な課題である。この二つを統一する授業指導課程、方法を模索しつつ、創造的な古典文学教育をめざしたいと考えている。⁶⁾

高校古典の初めての授業に対して意見を寄せたくれた生徒の意見をいくつか紹介しておきたい。健気な意見を率直に述べている。（傍線は筆者）

◇「僕は中三の時は、古典は難しくて嫌いだったけど、今は少しわかるのでちよつと好きになってきた。」

◇「内容は少々文法については意味不明ところがあったけど、授業を受けることに意味が解明されるにしたがつて、ようやく理解ができた。古文は国語のなかでも好きなほうなので、しっかりと取り組みたいと思う。」

◇「授業を受けた古典は、昔話のようなものだと思います。かぐや姫の話の竹取物語はどんなものかと思いません。古典はおもしろいというようなイメージをほんの少しだけでも受けました。」

◇「……『絵仏師良秀』では、文法が案外わかりやすかったので、

授業も、メモを取ったりしながら文章を楽しく読めたような気がする。これからもこんな感じで、楽しみながら、文章を読んではいけないと思う。」

◇「四月からの授業で僕は少しずつ古典に興味を持ちはじめました。中学の時は、古典がいやでたまらなかつたので、興味もちはじめることができてよかったです。がんばっていききたいと思っています。」

◇「古典の文章にあまりなれてなくて、文を見ただけでとても読む気がおこらなくなっていた。でも、授業を受けて、ほんの少しずつだけど、なれてきたような気がした。」

◇「……古典は確かに現代語と意味が違うのもあって、ややこしい面もあるが、ひもをほどいていく様な気分(やパズル感覚)で出来ておもしろ味があった。」

◇「僕はあんまり国語は好きじゃないけど、古典は話を聞きながら、イメージをすると、いろんなものが見えてくるから、現代文よりは、好きだと思う。」

◇「僕は、古典というものは、中学の頃から、あまり好きではなかった。文法的なことが、現代文と少し違ったりしていたので、内容がわかりにくかった。しかし、この四月からの授業では、そういう細かい点についての説明や、別紙プリントなどがあつ

たので、中学校時代よりは、内容がとりやすくなったようには思った(例えば現代語との違い)。これを機に古典がもっとわかりやすくなるように努力していこう思う。」

◇「何度読んでもあきがないのがこの古典で、今の現代文との大きな違いだと思う。これから、もっと古典を勉強していく中で、できるだけ古典がつくられた時代に自分が入り込んだような気持ちで勉強していきたい。」

四 まとめにかえて

——生徒創作『説話文学集』——

生徒創作の『説話文学集』は、「君らの『説話文学集』を創ろうという」私の提案に対して、生徒諸君が応えてくれたものである。

「真面目に書いたものは、それなりに評価する」、「努力した者には、校長や教頭に言って、何らかの『賞』を与えたい、それがダメだったら、私のポケットマネーで、食堂のラーメンかヤキメシか、それともジュースか、チケットを絶対用意する」、「ユニークで個性的なものを期待する」、「文法的なまちがいなど気にせず、自由に書いてほしい」、「ユニークで個性的なものを期待する。ユーモア、もちろんブラックユーモアも大歓迎である」、として書いてもらったものである。

「今は昔……となむ語り伝へたる」という説話の形式を踏まえ、「……」の部分は、時代、登場人物、内容は自由とした。

生徒は初めて、古典に出会い、いきなり「古典語」による「説話を書く課題」に戸惑いながらも、さまざまテーマを設定し、苦労しつつも、新鮮な面持ちでどうにか書いたようである。「中学校の時は、受験のためただ文を読んで、問題を解くだけで深く考えて読まなかったが、高校では、いろいろ考えながら読むので楽しい」、「受験のためだけに古典を読んでいたのも、内容について考えたり、登場人物の心理を考えたりしなかった。高校ではそこを深くやるのでもしろい」という意見も寄せられている。そういう声に授業者自身が励まされている。月に二回ぐらい「古典を読む会」をやるという声が数人の「帰宅部」の生徒から出た。そのことを知った同僚の若い講師の先生たちから「わたしたちも参加したい」という嬉しい申し出もある。学校の中で、放課後、生徒と教師が、古典の作品を中心に、熱心にディスカッションをしている姿など、今時、希少価値があるかもしれない。あとは、誰が企画・運営するかである。生徒の古典の旅が実り豊かなものになるよう、一緒に古典の旅を続けていきたいと考えている。

次に生徒創作の『説話文学集』を紹介したい。紙数の都合でそのいくつかしか掲載できない。ご了承願いたい。高校入学後、一カ月

半ほどしか古典を学習していない生徒の創作としては一応のレベルに達していると考えるが、どうであろうか。

【生徒創作の『説話文学集』より一部抜粋】

1 「不幸、十一年の者」

今は昔、伊勢に大黒屋一信といふ者ありけり。この者が船頭をとむる同志社丸、米を伊勢から江戸へ運ぶ途中、嵐に遭ひにけり。漂流の後、ロシアのアリュートシャン列島のアムチトカ島に着きにけり。一信ら二十人を乗せし船、もう使い物にならず。島民と力合わせ、小船を造り、日本に帰へりたきがため、本土ロシアの皇帝へと向かはんとす。雪・大嵐の中、ソリにて数年かけて、都のペテルブルグまで行きにけり。また、その途中、船員の幾人かは、命をなむ落としける。都にて親切なる加藤といふ者に出会ひけり。その者、いと名の知れたる者にて、この者の力を借り、皇帝に会ひ、帰国をゆるされたり。しかれども、船員の内、ほとんどの者、ロシアにて暮らすこと決め、一信、他二・三人とともに、十一年ぶりに、日本へ帰国せり。この時、一信、「ロシアからの道のりは地獄、ここは天国」とぞ言ひける、となむ語り伝へたる」とや。

2 「竹取物語」

今は昔、いやしき夫婦ありけり。この夫婦、子供できぬなり。竹を取りて世を渡りけり。夫、竹を取りけるに、竹の中に「かわいい

赤ちゃん」ありにけり。家に帰りぬ。この妻、心やさしき者にて、「この主、いかばかり嘆き求むらむ。いとほしきことなり。主を尋ねて返したまへ。」と言ひければ、「まことに。」とて、あまねくふれけるに、主といふ者出でにけり。その主、鬼なり。夫、驚きて逃げにけり。鬼、これを得て、あまりにうれしくて、妻を連れて、いやしき夫婦に、御礼を言ひに行きけり。村人、これを見、「かの夫婦は、鬼なり。」とののしりけり。この夫婦、村を出でにけり、となむ語り伝へたるをや。

3 「競馬」

今は昔、加藤といふ男ありけり。その男長者なりければ、毎日遊びける。ある日、競馬したりける折に、見知らぬ人近づきて、その人、言はく、「八番の馬、いみじく良きに見えければ、この馬の勝ちたること、間違ひ無きことと思ひたる」そを聞きたる加藤、八番の馬の単勝に、全財産をぞつぎこめり。しかるに、八番の馬、故障発生し、予後不良となりければ、加藤が持ちたる券、すべて紙くずとぞなりにける。競馬、楽しむほどにすること、良ければ、財産つぎこみて、勝負するは、愚かなることなり。人の言ひたること、安易に信ずるも良きこととは言えず、となむ語り伝へたるをや。

4 「無責任総理語」

今は昔、村山〇市といふ総理大臣ありけり。心ひかえめで、善人

のやうに見えたり。皆彼に期待をかけり。

さて、この大臣まゆげ長かりけり。三四寸ばかりなりければ、手入れ、いと大変そうに見えたり。色は真つ白にて、誰が見ても、第一印象として残りけり。此総理、予算案を決定せり。されど、一月の国会を前にして、いみじき無責任にも総理大臣を辞退せり。

国民、ますこみ、大きに腹立て、さわぎ、わめき、困りけり。世の人、無責任総理村山となむ、かたり伝へたるをや。

5 「焼きもち」

今は昔、小学校に酒井君といふありけり。我と酒井君、とほき店にて、焼きもちこしとガムを買ひ、自転車を使ひて、公園に行かんとす。

酒井君の自転車、横にかごありけり。酒井君そこに焼きもちこし入れむとせん。公園の手前の道路、車多く通りけり。我と酒井君急ぎて、道路を渡りけり。すると、酒井君、焼きもちこしを落とす、車、出でて、焼きもちこし踏みけり。我と公園におりし友達いとおかしく笑ひけり。酒井君、泣きて家に帰りけり。

自転車の横かごにあまり物を入るべからず、となむ語り伝へたるをや。

6 「髪多き教師のこと」

今は昔、同志社香里高校にY氏といふ教師ありけり。社会なんど

よく習ひて、年久く行て貴とかりければ、ワンゲル部の顧問となり。部室、部員も少しも荒れたる所なし。あたかもこの者の頭のようなり。部室には御灯絶えず。おりふしのミイティグ、登山、しげく行はせければ、山中にひまなく部員来、にぎはひけり。また、そのあたりに小家どもおほくいできて、里もにぎはひけり。

さて、この者髪多かりけり。面積にして30cmばかりの樹海と3cmの部分に分かりけり。この3cmの部分、少し樹海と離されたり。ゆえに、この部分、あたかも海に浮かぶ小島の如く見えける。色は黄土色にて、フライパンの油のやうにぎとぎと光りけり。かゆがる事かぎりなし。ハンカチを冷やして頭をふきければ、やうやくにして、かゆみ治りけり。かくのごとくしつ、かゆがる日数はおほくありければ、此作業うまき白波瀬といふ部員一人さだめて、かゆがるごとにおかす。それに心地悪しくして、この者いでざりける折に、頭かゆき時に、頭ふく人なかりければ、「いかにせん」なむどいふ時に、つかひける西村といふ生徒の「我はよくふきたて参らせてん。更はその部員にはよも劣らじ。」といふを、部員聞きて、「この者かく申。」といへば、古參の部員にて、みめもいみじくあやしけれど、しかたなきゆえ、うへに召しあげてありけるに、ハンカチを取りて、うるはしくふきければ、此法師、「いみじき上手にてありけり。例の部員にまさりたり」とて喜ぶ程に、この者、はなをひんとて、そ

ばざまに向ひて、はなをひる程に、手ふるひて、ハンカチゆらぎて、小島ぶつりと抜けぬ。教師大きに腹立て、床に落ちたる小島をひろひつ、「をのれはまがしがかりける心もちたる者かな。下手くその床屋とは、をのれがやうなる者をいふぞかし。我ならむやごつことなき人の御頭にも参れ。それにはかくやはせんずる。うたてなりける。ころなしの痴れ者かな。をのれ抜け抜け」とて、追いたてければ、立つまゝに、「世の人のかゝるおかしげなる頭もちたるがおほしまさばこそ、頭ふきに参らめ。おこの事の給へる先生かな」と言ひければ、部員どもは物の後に逃げのきてぞ、笑ひける。心曲がれるは、冥咎めて髪を失う。この理、少しも違ふべからず。返す返すも、心は清く、素直なるべきものなり、となむ語り伝へたるとや。

7 「ほんだ奔田が強き妻の事」

今は昔、奔田といふありけり。いみじき石好みければ、日毎ひねもす石磨きけり。妻、魚売りて、世を渡りけり。奔田、石磨きたるをことにして、世渡る事など知りもせず。かくのごとくこそ過ぐれば、妻、心せくまじけれ、奔田いぬ間に、石投げ捨てたり。奔田、大きに腹立て、「立て立て」と言ひければ、妻、「えこそ罷り出づまじけれ、家の主は、我にこそあれ。をのれこそ去ね。」とぞ言ひける。家の辺には、来訪ひし人々の集まりて、ひまなし。

ある老人「昔、かの妻、咎められけり。今、役人笑ひてぞ見ける。時、移りけり。我も年老いぬ。」と言ひけり。

儒教にては、悪しき妻なり。しかれども、今の人、悪しき夫とぞ言ふらむ。かくのごとき無常といふにや。

その後、奔田、その家をば去りぬ、となむ語り伝へたるとや。

8 「ドラえもん」

今は昔、のび太といふ男ありけり。この男、いと怠け者なりければ、この男を助けるべく、未来よりドラえもんといふ者、来たり。

この者腹の中より、様々な道具、出だして、のび太を助くれば、人々皆、驚ろきぬ。されば、人々愛で合へり。されど、ドラえもん小さき頃、ねずみに噛まれければ、ねずみを苦手したり。いかにすぐれし者にも、必ず、弱きところあるものなり、となむ語り伝へたるとや。

9 「脚速き高校生の話」

今は昔、ある高等学校に、いみじき脚速き高校生ありけり。その者、頭悪く、のちの事考えることせず。この者脚速きこと、自負し、驕り高ぶりて生活しにけり。さる日、この者所属せし陸上部に行きて、周りの、己れより遅きを見て、練習をなむ止めにける。そのうち、日毎、陸上部に来るのみにて、己れより遅き者を見て、「なんと遅きことぞ。さあれば、陸上部の恥ぞ。」とぞ冷やかしかける。か

くして過ぐす日数重なりける日、部員「さあらば、我とともに走られん。」とて挑みけり。先のごとく練習せざれば、百メートル、始めより負けぬ。最後には、差をいたくあけられ、敗けにけり。その後、懸命に練習するも、前のごとくにはならず。すべての試合に負けにけり。

旧記のごとく、「驕れる者久しからず」なり。驕り高ぶるは滅びに通ず、となむ語り伝へたるとや。

10 「粥」

昔、成田の山に狐の夫婦ありけり。夫、終日寝所に居て、働かず。妻、働らきけれども、不得手にて、夫婦粥ばかりぞ食ひける。妻、「働き給へ」と言ひければ、夫、「解りし」とて、家を出でにけり。妻一刻後に家を出づ。夫、道にて寝ぬるに、盗人物を盗るを見て、「したり。我も盗人にならむ」とて、盗人に化けて人の家に入り、物をぞ盗りたりける。別の所にて、妻、年貢を取りたる代官を見て、代官に化けたり。代官商いの人の家に入りて、年貢を取りて逃げけり。夫妻、共に物を得たり。

盗人の夫、羅生門の前にて、代官の妻に会ひにけり。互いに夫、妻とわからじ。夫、代官を見て物を置きてぞ逃げける。同じく妻、盗人を見て、「命だに助けさせ給へ。」と、物を置きてぞ逃げける。夫妻共に物を失ふ。かくて、今日もこの夫妻「粥」を食ふ。

後に夫妻、生まれ変わりで、人になり、めぐり会ひて加藤といふ夫婦になりにけり。

生徒の作品に対して、若干意見を述べておきたい。

1は、天竺・大唐ならぬ、遭難した者がアリューションからベテルブルグ「ロシア」までゆくという壮大な話であり、井上靖の『オロシヤ国酔譚』にヒントを得たものらしい。2は、『竹取物語』のアレンジである。3は、ひそかに競馬を楽しんでいる様子がうかがわれる。「予後不良」なる専門用語が飛び出している。4は、政治への「批評意識」が見られ、するどい。「ますこみ」と平仮名の表記にセンスを感じる。5・8は、なんとなくほのぼのとしたユーモアを感じさせる。6・7は、「教師物」、生徒は読まれて困る教師について記さない。生徒の感性は鋭く、いわゆるキャパセティーの広い教師しか話題にしない。6は、「鼻長き僧のこと」を、目の前の教師のこととして、皮肉に書いたようである。細部もリアルであり、かなりの出来栄である。7の「奔田が妻の事」も地学の教師へのあてこすりである。教室で朗読すると、生徒は、机をたたき、椅子から転げ落ちて大声で笑いころげた。「笑いの教育」、つまり生徒の心を和らげ、教室を開放することを意識した取り組みであった。9は、自己への内省を虚構化したものである。10は、民話風な味を出しており、傑作の一つに数えられるかもしれない。なお時折、

「加藤」が出てくるのは、授業者に対する生徒の揶揄と親しみの意識がはたらいたのであろう。全体としては生徒は楽しくしかも意欲的に取り組んだようである。

「古典教育の発展」として位置付けて取り組んだ、『伊勢物語』を読んで、生徒に「歌物語」を創作してもらった実践についても報告したかったのであるが、紙数がつきってしまった。後日、報告できればと思う。

注

- ① 「古典の広場」は、生徒と教師の紙面での対話を目的として発行したものである。基本的な学習事項を具体的に提示した。また学習の目標、作品を読む際のポイント、補助教材、生徒の声、生徒の作品を掲載したものであり、「教科通信」である。年間五十号を発行をした。
- ② 高校入学後、初めて接する古典の作品なので、ていねいに読むことを第一義にして、「読総合法（児童言語研究会の読み方法）」的な授業を展開した。
- ③ この場面では「火」のイメージから炎の色、逃げ惑う群衆の姿、家中にとり残された家族の姿や悲鳴までイメージさせる豊かな形象読みを指導するべきであろう。五感を総動員した読みが必要であった。中途半端になってしまった。
- ④ 尊敬表現の指導は、高二時ぐらいにするのが適当と考えるので、この段階では深入りしない。
- ⑤ 「形容詞・形容動詞」は、時代によって意味の変遷があり、現代では使用されなくなってしまうものも多い。常にその点を強調しておく必要がある。「あさまし」の意味内容を正確に理解するのは高一の生徒に

困難である。古語辞典の力を借りることも合わせて強調する。

- ⑥ 「創造的な古典文学教育」をめざして、この数年来、拙い実践を積み重ねてきた。この間の実践を拙著『授業記録 古典文学を読む』、『授業記録、軍記物語の系譜』にまとめた。